令和７年１月27日

南の風 For Junior I 77

南部地区ミニバスケットボール連盟
会　長　藤原　敬一

１７６の続きです

前号で、プレーする中で「有利」か「不利」か判断して走ることが大切です、と書きました。これが**U12からできると、相手を感じながらプレーするという能力が磨かれます**。**「不利」なら助けに行く、つなぎに行く。この判断がきちんとできることが、オフボールの選手に求められます**。**そしてその判断を５つの各局面でサポートしていくことがコーチの役目**になります。

一方ディフェンス側が「有利」というのは、相手ボールマンが自チームのディフェンスに苦しめられている状態のことです。その場合ボールマンは困っている状態になりパスしたいわけです。そこでオフボール選手のディフェンスは、近くの相手選手をディナイするとか、トラップに行くとかして、さらに有利な状態を選んでできるようになることが闘争的な選手と言うことになります。**コーチに「行け！」と言われたからトラップに行くとか**、**トラップに行くことがチームの決まりですというのではなく**、**相手の状態を見て判断できるように導くことが育成コーチには求められます**。

逆に、ボールマンディフェンスが「不利」→抜き去られそう・破られそうなら、ヘルプをする、レスキューに行く判断をします。また**相手のトランジションから速攻があったとき、フォーム（ペイントのノーチャージセミサークルのトップの位置）に入ってペイントを守らなきゃといったことが、走りながら判断できることが、バスケット的な能力がアップする**ことです。

≪クリエイト・チャンス≫

クリエイト・チャンス局面についてです。例えばどこにもノーマークがないし、クローズアウトもミスマッチもなく、相手が構えている状況でどうやってノーマークを作るのか、となったら育成のU12の観点でいうとカッティングや１対１で攻めるのが基本です。（他にポストプレー、ピックプレーなどそれぞれのチームの強みで攻めるやり方もあります）最初から「有利」ではないですが、始めた１対１で「不利」なら味方がレスキューに来るし、相手が足を引いてくれて「有利」になったら、ヘルプが来て空いた味方にパスする、と言うことが判断できます。「不利」なのに難しいタフショットを選択してしまうとか、また自分が「有利」なのにパスしてしまうのは判断が悪いことになります。ヨーロッパでは、この判断を育成年代でものすごく重要視していると聞きます。

オフェンスでプレー中に、判断が悪くて混雑しているペイントに突っ込んで行ったとしても、その中でシュートをねじ込んでこれるとか、何とかできるような能力も磨かれる要素もあるかなと思います。

そのことと判断力が磨かれていないということが、”トレードオフ”みたいな「どっちか取ったら、どっちか取れない」みたいな考えもあります。しかし、これはフィジカルトレーニングとか、そういうやり合いや戦いの中で、子どもたちが勝手に身に付けて行く身体的な感覚と、判断しようとする習慣ってことは、**きちんと両輪で磨いていかなきゃいけないということ**だと思います。**U12の年代で言えば、コーディネーショントレーニングとか、いろいろなフィニッシュスキルといったことをやりつつ、今ここで取り上げている「判断」の両軸をしっかり取り入れていく**ことは大事になります。